

奈良山丘陵の瓦窯

持統8（694）年、持統天皇は飛鳥浄御原宮から、京域を整備した本格的な都である藤原京へ遷都しました。宮の中心部である大極殿・朝堂院と大垣などに瓦が使われ、その使用枚数は150万枚とも推定されています。

和銅3（710）年に藤原京から遷った平城京では、宮のほか、京内でも一部瓦葺きの建物が建ち並び、平城宮・京での瓦使用枚数は500万枚とも600万枚とも言われています。

平城宮・京で用いた瓦を製作した瓦工房が、現在の奈良県奈良市と京都府木津川市の境にある奈良（平城）山丘陵に点在します。現在、この奈良山丘陵では40地点ほどの瓦窯跡が確認されています。

平城宮・京の造営に伴う瓦窯は、最初は5世紀に朝鮮半島から伝わった須恵器焼成窯に似た^{あながま}窖窯で焼成されていました。窖窯は須恵器のように壺や鉢・甕など形や大きさが異なるものを焼くのには効率的でした。一方、瓦は規格があり大きさが揃っており、須恵器ほどには高温で焼く必要がなく、瓦を焼く窯は徐々に^{ひらがま}窖窯から瓦を専ら焼く平窯に変化していきます。

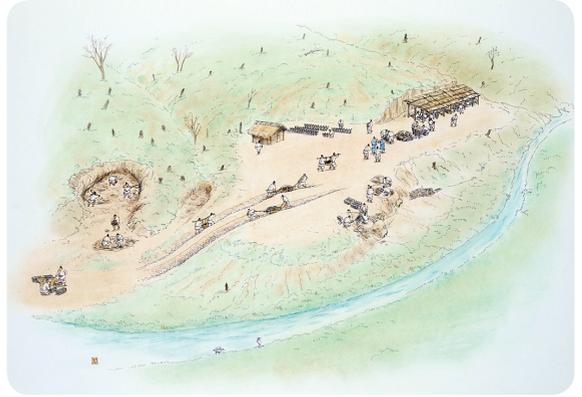


瓦窯で見つかった2条の通路

瓦を生産し出荷するまでには、①粘土の採掘→②粘土こね（瓦にあった砂や混和材を混ぜる）→③瓦の形に成形→④乾燥→⑤窯での焼成→⑥焼成した瓦の確認→⑦供給先への搬送、の作業が必要です。

これらの一連の作業手順がよくわかる遺跡に、聖武天皇の恭仁宮の造営と前後する時期に造られた木津川市鹿背山瓦窯かせやまがあります。

鹿背山瓦窯では、丘陵の上と下をつなぐ2条の道が見つかりました。溝底には石を敷き詰めて斜面を歩きやすくなる工夫がされ、一



鹿背山瓦窯の想像復原図（早川和子作画）

輪車の通った跡が明瞭に残っています。この道を利用して瓦や材料の粘土が行き来したようです。丘陵の下には、粘土を採掘した大きな穴が見つかりました。その穴の中には、粘土や粘土に混ぜた土・砂を運ぶための植物繊維を網目に編んだ「もっこ」が残っていました。丘陵の下では粘土と土・砂がこねられ、丘陵の上に運ばれます。ここには小屋があり、その小屋で平瓦や丸瓦、軒瓦や鬼瓦に成形したり、成形した瓦を日陰に置いて乾燥させたりします。

乾燥した瓦は丘陵の斜面に造られた窯で焼成されます。この窯への瓦の出し入れは天井を壊しておこないます。取り出された瓦は、一輪車を使って丘陵の下に降ろされ、製品のチェックを受けた後に都に搬出されたと推測されます。

同じ木津川市にある上人ヶ平遺跡いちさか（市坂瓦窯）は、鹿背山瓦窯が操業を終了した750年前後に操業しています。聖武天皇は難波宮から、再び奈良の都平城宮かんとに還都しますが、数年の間に荒れ果てた都を本格的に再造営を進める時期に用いた瓦工房かわらこうぼうです。この遺跡では、瓦の成形や成形した瓦を乾燥するための作業用の建物が4棟、近接して建ち並び、全体としては体育館程の大きさとなる建物群になっています。

（石井清司）